

主 題：愚か者の行く末

聖書箇所：詩篇 14篇

テーマ：神を否定する者にはどのような結末が待っているのか？

今朝、ともに学ぶみことばは詩篇14篇です。その前にこれまで詩篇を通して学んで来たことを思い返してみてください。私たちは今日まで詩篇1～13篇までを見て来ました。ダビデを通して神は私たちにいろいろなことを教えてくれていたのです。皆さん覚えておられるでしょうか？私たちはこの世のものに満足を見出すのではなく、主にあって幸いな者として生きていくことができるということ。私たちは喜びを見出すことが出来ないような困難や試練の中にあっても、主にあって平安を覚えることができること。また、創造主であり聖い神の前にどのような礼拝をささげるべきなのか？そのことも学びました。今回は神が遠く離れてしまったように感じ孤独や絶望を覚えるような状況の中で、私たちはどのように祈ることができるのか？を見ることができました。

もちろん、他にも多くのことをみことばから見て来ましたが、こうして学ぶにつれて皆さんの中にこのような思いが湧き上がって来ていないでしょうか？神のことばは確かに生きたことばだと。この地上を私たちが日々歩いていく上で必要なもの、知恵や力を与えてくれている。私たちに与えられている聖書が神のみことばであるゆえに、私たちがみことばを見るときに、私たちの愛する神がどのようなお方かを知ることができ、この神の前に私たち人間がどのような存在か？そのことも知ることができ、また、日々の生活で経験することに対しても、私たちの周りで起こっていることに対しても、必要な理解や助けをみことばの中に見いだすことができるのです。

まさに聖書が「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」（ヘブル4：12）と、このことば通りではないでしょうか？神のことばは生きていて、そのことを知っている私たちはそのみことばにどのような応答しているのでしょうか？聖書は何千年も前に書かれた単なることばではなく、今も生きていて私たちの心を変える、そんな力がある神のことばなのです。だからこそ、私たちがこのみことばを見るときに、みことばを聞くときに、ただ聞くだけの者であってははいけません。

これからみことばを見ていきますが、その中には私たちが聞きたくないような受け入れ難いことばがあるかもしれません。たとえそうであったとしても、聖書が言っていることが神のことばであるから、私たちはそれに誠実に耳を傾けそのことばに従うことが必要になるのです。どうでしょう皆さん？自分自身の心を見るときに、みことばに対する愛が日に日に増し加わっているのでしょうか？今日のテキストである詩篇14篇は私たちに大切な真理を教えてくれています。神はこの箇所を通して私たちが聞くべき大切なことを教えてくれているのです。先ず、ここを読みましょう。

詩篇14篇 指揮者のために。ダビデによる

「1 愚か者は心の中で、「神はいない」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行っている。善を行う者はいない。2 【主】は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。3 彼らはみな、離れて行き、だれもかれも腐り果てている。善を行う者はいない。ひとりもない。4 不法を行う者らはだれも知らないのか。彼らはパンを食らうように、わたしの民を食らい、【主】を呼び求めようとはしない。5 見よ。彼らが、いかに恐れたかを。神は、正しい者の一族とともにおられるからだ。6 おまえたちは、悩む者のはかりごとをはずかしめようとするだろう。しかし、【主】が彼の避け所である。7 ああ、イスラエルの救いがシオンから来るように。【主】が御民の繁栄を元どおりにされるとき、ヤコブは楽しみ。イスラエルは喜べ。」

さて、この詩篇を通してダビデが教えていたことは「神はいない」とその存在を否定して生きている無神論者についてです。この「無神論者」ということばを聞くとき、多くの人はずれがどのような人なのかを容易に思い浮かべることが出来るでしょう。辞書には「神の存在を認めない人」とそのように定義されています。まさに、今読んだ14：1が言っている通りです。「愚か者は心の中で、「神はいない」と言っている。」と。神はいないのだとその存在を否定して生きている者が無神論者と言われる者です。

みことばを見ていく前に皆さんに覚えておいてほしいことは、ダビデは単に「神はいない」とそのように口にする者だけを指して「無神論者だ」とは言っていなかったということです。神にとっての「無神論者」とは聖書の神を無視して生きている者、その存在を否定して自分の好き勝手に生きている者、そのようなすべての者を「無神論者」と呼んでいたのです。ダビデが言っていることは、この世界のすべての者、ここにいる私たちのひとり一人もみな例外なくある時点においては、聖書が教える神を否定している無神論者として歩んでいたということです。

すべての人は神を否定して歩んでいる者だったと言うのです。そして、そんな無神論者に対してダビデははっきりとこう告げるのです。「あなたがたは愚かな者だ」と。こう聞いてなんと厳しいことを言うのかと思うかもしれませんが、でも、ダビデがこのように言ったことには理由があったのです。では、なぜ彼はそのように言ったのでしょうか？ いったいこの人たちのどこが愚かだったのでしょうか？ 今日はそのことをこの詩篇 14 篇を通してごいっしょに考えていきたいと思えます。この箇所から、特に、愚かな者がどのような存在なのか？ そのことについて三つの描写を見ることが出来ます。人は神の前にどれ程汚れた者なのか、私たちに一人一人の心がどれ程罪に汚染された汚れたものであるのか、そして、こんな汚れた者に与えられた主のすばらしい救いの希望、そのことをここから見ていきましょう。

### ☆愚かな者はどのような存在か？

#### 1. 愚か者の特徴 : 神を否定する者 1-3 節

1 節には愚か者の特徴のまとめが記されています。「愚か者は心の中で、「神はいない」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行っている。善を行う者はいない。」と、ダビデはその特徴を先ず「神を否定する者」だと述べています。1 節を正しく理解する上で注目していただきたいポイントが二つあります。

a) 愚か者 = 恐らく、このことばを聞くと多くの人は「教養のない、ふざけてばかりいて馬鹿げたことや賢くない行動をする人」の姿を思い浮かべるかもしれませんが、しかし、それはダビデがここで言わんとしていたこと、意図していたこととは少し違います。ダビデはここで彼らの頭が悪いということ、彼らが知識に欠けているということをやり玉に挙げて、あなたがたは愚かな者だと責めたものではありません。むしろ、このような愚かだと言われる者たちの中にはすばらしい教育を受けていて、知識や教養を身に着けている知的で聡明な人物が数多くいるのです。

では、なぜ彼らが愚かなのか？ ダビデはその理由をこう言っています。彼らは神の存在を十分知っていながらそれを否定して生きているからだ。彼らは頭はいいかもしれないし、多くの知識も持っている知的な人物かもしれないが、彼らは最も当たり前のこと、最も大切なことを見ることができていない。彼らは本当の神の存在に気付いているにも関わらず、それを拒んでいる、だから、愚かな者だと言うのです。彼らが抱えていた問題は「頭」ではなく「心」でした。心に大きな問題を抱えていたのです。

b) 心の中で = 二つ目に注目するポイントは「心」です。彼らは「心の中で」神の存在を否定していたのです。この「心」ということばは聖書の中では私たちの本当の姿を表す場所として描かれています。心は単に私たちの感情だけを表す場所ではないのです。私たちの知的な部分、考えや思い、意志、動機など、私たちのすべてを表す場所です。だからこそ、神は私たちの外側の振る舞いを見るのではなく、私たちの本当の姿を表す心をご覧になるのです。そのことが I サムエル 16 : 7 に書かれています。「しかし【主】はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」と。

心がその人のすべてを表しているからです。愚か者は心の中で「神はいない」と神の存在を否定していたのです。つまり、こういうことです。彼らが神を否定していることは、彼らが無意識に神を信じていなかったからでも、神に関する知識が乏しかったからでもありません。彼らは十二分に神の存在を知っていながら、意図的に自らの意志をもって「神は自分には関係のない存在だ」と、神を拒んでいたのです。神など私には必要ない、自分で考えて思うように生きていけばそれで何の問題もない。自分で何もできないような弱い者には神は必要かもしれないけれど、私の人生には神など必要ないと言うのです。

皆さん、このようにしてみことばを見ると、聖書が教えていることは明白です。ある人は自分は神など知りません、神の存在など信じていませんと言われるかもしれませんが、その人に聖書が教えることは「いいですよ、あなたは本当は神がおられることを知っている。でも、それを受け入れたくない

だけでしょう？」です。あなたが神の存在を受け入れたくないだけ、神の存在を信じたくないという選択を自ら選んでいるだけだと言います。だれ一人として「神を知らない」と言える人はいないと聖書は教えるのです。このことはパウロもこのように記しています。ローマ1：18-20「:18 というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。:19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」、パウロもはっきりと言っています。神の存在は私たちに明らかだと。「神の永遠の力と神性は」神が造られた被造物を見るなら、世界が創造された時から私たちに明らかにされていると言います。だれが見ても子どもでも大人でもどんな人にも明らかなことだと。

このことばの通り、私たちはそのことを知っているのです。周りの自然界を見渡すなら、そこには人の理解の到底及びもつかない壮大で美しいもので溢れていることを知っています。この世界を見るとき私たちがいかにちっぽけな存在か、そして、これらを造った神がどれ程偉大な力をもったお方か、そのことをはっきりと見て取ることができるのです。聖書が教えていることは、神の存在が余りにも私たちの目に明白であるからこそ、その事実を自ら拒んで真理を阻んでいる者には神の怒りが下る、それは当然のことだということです。明らかなることを拒んでいる者に対して神がさばきを与える時、だれ一人それを言い逃れることができる者はいない、弁解できる者はいない、神が存在しているという当たり前のことを自らの意志で拒むならその者がさばかれるのは当然だと言うのです。当たり前のことだから、神の存在を否定することは非常に愚かだと、みことばはそのように教えているのです。

皆さん、残念ながら、私たちは神をこうして認めたくない、受け入れたくないという思いを持って生まれて来ているのです。そのような罪に汚れた心を持っているのです。だから、私たちが自分の心を吟味するなら、私たちのうちには自分のために生きていきたいという思いであったり、だれかに自分の考えを邪魔されたりだれかに指図されたりしたくないという、そのような思いを持っているのです。だからこそ、たとえ神の存在が明らかであったとしても、それを認めてしまえば自分の好きなように生きていくことができないと、そのことを知っているゆえにその存在を否定しようとするのです。自分の好きなように生きていきたいからそれを邪魔する神だからそれを否定しようとする。

箴言1：7にはこのように書かれています。「【主】を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」と。人にとっては主を恐れること、主の教えを守って生きていくこと、それは何よりも大切なことです。しかし、それが自分の望む生き方を妨げるものであるなら、自分の人生をすべて神にささげていかなければならないとそのことを知ってしまえば、人はこの方の教えに耳を傾けようとはしないのです。自分の人生を決められるものに私は耳を傾けたくない、この方に私は背を向けていこう、従いたくないと、このようにして神などいないと心に決めて生きようとしていた者たちの姿が1節の続きに書かれています。「彼らは腐っており、忌まわしい事を行っている。」と。「腐っており」とは「破滅している、ダメになる、台無し、汚れ切っている」という意味をもったことばです。つまり、神を否定して自分の人生から神を取り除こうとする者、彼らの歩みは内側も外側も道徳的にも倫理的にも汚れ切った破滅的なものと聖書は教えているということです。

思い返して見ると、ノアの洪水のさばきが下される前の人々の姿もまさにこのようなものでした。創世記6：5、11-12「:5 【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」「:11 地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。:12 神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。」、ここで用いられている「墮落」ということばが「腐っており」と同じことばです。つまり、人々が本来従うべき神に背を向けて歩んでいる結果、その心は悪にまみれて墮落しあらゆる悪が人々の間で横行するようになっているのです。神を否定するその心から生み出されるものは邪悪な忌まわしいものです。

だからこそ、ダビデは1節の最後に「善を行う者はいない。」と言います。これは人の目にすばらしいことがいっさい出来ないということではありません。神を否定している者でも社会にあって、また家族や友人に対して喜ばれるような誉められるような良いことをすることは出来るからです。では、何を言っているのか？「善を行う者はいない。」、神の目にはすべての者が行うことは価値のない汚れたものだとい

うことです。生まれながらの人間が行うどんなに良いものも人の目に良く見えるものも、神の目には汚れたものなのです。神を否定する者はそのすべてにおいて、知的な部分、感情、願いも心の動機もからだ全体もすべて罪によって墮落し、主を喜ばせることがいっさいないということを言っているのです。生まれながらの人間は頭の前から足の先まで、すべての部分において罪によって汚れているのです。これが聖書が教える生まれながらの人間の姿なのです。ジョン・カルバンはこのように言っています。「私たちは罪の力によって完全に支配されている。すべての知性、すべての心、私たちの全ての行為がその影響下にあるのだ。」と。聖書が教えていること、それは確かに厳しいものかもしれませんが。しかし、私たちが聞かなければいけないことです。なぜなら、私たちはみな生まれながらに神に喜ばれない罪人だからです。私たちのうちには神を喜ばせることが出来る部分はいっさいないのです。

ダビデは「すべての人は墮落している」と言いましたが、これはダビデ個人の主張でも考え意見でもありません。2節にそのことが示されています。「【主】は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。」と。人々が墮落している姿を目撃したのはダビデだけではなく、主ご自身が天から人々のその姿をご覧になったのです。主は探しておられました。自分と関係をもち自分に従いたいと尋ね求める者がいないかどうかと…。また、神が存在していることを認めてその事実に対して正しく応答する者、賢い選択ができるような悟りのある者がいないかどうかを神はご覧になったのです。

その結果どうだったか？3節に「彼らはみな、離れて行き、だれもかれも腐り果てている。善を行う者はいない。ひとりもない。」とあります。結果は悲惨なものでした。神を求める者はだれ一人いなかったのです。すべての者は主から離れ主に背を向けて生きようとしていたのです。ここで気付くことは、1節から3節を見ると「善を行う者はいない」、「だれもかれも」「ひとりもない」ということばが繰り返されています。この世にはだれ一人として神を求めて生きようとしている者はいない、そこには例外はないと言います。生まれながらの人間はみな神を除いて自分勝手に生き方をしていると、そのことをダビデは繰り返して教えていました。そして、そのような人に対してダビデは「あなたがたは愚かだ」と言います。すべての人が神を拒んで否定している、そんな腐り果てた者たちだと。そのことに対して神学者のピーター・クレイギーは「愚か者は人類の中で珍しい亜種ではない。すべての人間が神の知恵から離れた愚か者である。」と言っています。

皆さん、これが聖書が私たちに教えている私たちの姿です。今、神の存在を信じていない者も、聖書の神ではなく自分に都合の良い神を頼りにしている者も、神の存在に関心を払わず自分のために生きている者も、私たちはみな生まれながらに「神はいない」とその存在を否定して生きている、そんな愚かな者だ、ここに例外はないと言うのです。ダビデはこのように1～3節で私たちに大切なことを教えていました。私たちの本当の姿を教えてくださいました。これを聞いてある人は今こう思うかもしれません。自分にとって神など関係ないとしてどれ程自分勝手に生きても、神に喜ばれるような生き方をしなかったとしても、神は自分のことなど見ておられない、何をしようと問題ではないと。もし、そのように考えているなら、今から見る4～6節のみことばに耳を傾けてください。神は主ご自身を無視して好き勝手に生きる者に対して、決してそのまま良しとはされていません。

## 2. 愚か者にふさわしい報い : 神の厳しいさばき 4-6節

ダビデは続けて愚か者には必ずそれにふさわしい報いがあると教えます。神の厳しいさばきがあるということです。4節「不法を行う者らはだれも知らないのか。」と、ここで愚か者に対して主が抱かれた驚き、あきれている姿を見ることができます。いったいどうして彼らは自分たちのしていることが愚かなことだと気付かないのだろうか？と。神の存在は明らかなのにその神を否定して自分勝手に生きていること、それがいかに虚しく価値のない悪に満ちたものであるか、なぜ、人々はそのことが分からないのだろうか？と言います。神はその答えを求めていたのではありません。それはもう主はご存じです。彼らの愚かさの原因であることが分かっていました。しかし、それでも主はその事実が受け入れ難いのです。「いったいどうして人はこの当たり前のことに気付かないのか？」と言うのです。

このように嘆かれた主ですが、残念ながら、罪に汚れ盲目になっている愚か者たちは、その愚かさに気付くことはありませんでした。それどころか、変わらず主の前に嫌われることを行い続けていたのです。彼らはこの主を憎むだけでなく、それに飽き足らず、神を信じて従おうとする神の民に対して悪意

に満ちた振る舞いをしているのです。彼らは自分たちが否定する神を信じて従おうとする者たちを忌み嫌って、彼らの信仰をばかにして傷つけ苦しめようとしていました。4節の続きに「彼らはパンを食らうように、わたしの民を食らい、」とありますが、ここで言わんとしていることは明白です。私たちにとって主食であるパンを食べることは特別なことではありません。ごく自然にどこでも私たちはパンを手にすることができ食べることができます。これがごく当たり前のことになっています。これと同じように、主を否定する者にとって主に従おうとする者を迫害することが当たり前のことになっているということです。主を否定する者にとって主を信じる者を苦しめることは、彼らが改めて意識して考えるものではなく、ごく自然に行われているものだということです。

言い換えれば、主を愛して主に熱心に従おうとする者たちはそうでない者たちから迫害を受けることは避けられない事実だということです。思い返して見れば、イエスもそのことを言われていました。ヨハネ15：18－20「：18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。：19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。：20 しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」と。また、マタイ5：10－12でもこのように言われていました。「：10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。：11 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。：12 喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」

兄弟姉妹の皆さん、私たちも様々な場面で信仰ゆえに迫害を受けることがあります。私たちが主の証人としてこの世で忠実に生きていこうとするなら、必ず、迫害に直面するのです。そのことが約束されていました。それが直接的な暴力でないとしても悪意あることばや冷たい態度で私たちが傷つけられることがあったりします。主に従っていくということは多くの犠牲を伴う簡単なことではないのです。

でも、聖書が言っていることは、私たちがたとえそのような状況に置かれることがあっても、大切なことをいつも覚えておくことができるということです。それは私たちの模範であり愛する主が私たちのために受けなくてもいい痛みを受けて苦しんでくださったということです。その苦しみゆえに私たちには救いが与えられ、今、生かされているということです。私たちがこの世にあって迫害を受けるときに、そのことは主が通られたその足跡を辿っているに過ぎないのです。だからこそ、もし、私たちが主のために苦しみを受けるのであれば、私たちのすべきことはその相手にやり返すことではなく、そのことを主にゆだねて、そして、相手のために祈ることです。それができるのです。また、自分のために苦しんでくださった主の姿をいつも覚えて、天に用意されている報いを期待して歩んでいくことができます。義のために苦しむ者には「天ではあなたがたの報いは大きいから。」と、そのように主に忠実に生きていく者を主は喜んでくださるのです。

さて、愚か者たちは正しいことが何か分からず、だれ一人として「【主】を呼び求めようとはしない。」のです。主を憎み、それだけに飽き足らず、主に従う者たちを迫害して苦しめていたのです。皆さん、もし、ここで話が終わっていたとするなら、そこには希望などありません。しかし、続けてダビデは5、6節でこのように記しています。「：5 見よ。彼らが、いかに恐れたかを。神は、正しい者の一族とともにおられるからだ。：6 おまえたちは、悩む者のはかりごとをはずかしめようとするだろう。しかし、【主】が彼の避け所である。」と。神は愚か者をそのまま良しとはされませんでした。

ダビデは神を否定し自分の望むままを生きようとする者が「恐れるようになる」と言ったのです。5節の「いかに恐れたか」と訳されている動詞は完了形が用いられています。言い換えれば、彼らが恐れるようになる、そのことはまだ起こっていないけれど、あたかももう起こったかのように、この先必ず成し遂げられることとして表現されているのです。ダビデは言います。今はすべてが自分の思い通りに順調にいつているとあなたは感じるかもしれない。自分のやっていることの愚かさに気付かないかもしれない。自分たちは好きなように生きていてそれで問題ない安全だと思っているかもしれない。でも、必

ず、すべての愚か者が主の前に恐れを抱く日がやって来る、すべての愚か者が必ず主の厳しいさばきを受ける日がやって来ると言うのです。

Ⅱコリント5：10でもそのように言っています。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」と。聖書が教えていることは明白です。必ず、いつかそれぞれが行って来たことの報いを受ける日がやって来るのです。そして、その日、神を否定して来た者は聖く正しい審判者の手によってさばかれるのです。そのときにこれまで主に従おうとする者たちを苦しめ辱めて来た者たちが、今度は自分たちが辱めを受けるようになるのです。

詩篇14篇の内容は詩篇53篇にほとんど同じことばを用いて記されています。53：5には「辱め」についてこのように記されています。「見よ。彼らが恐れのないところで、いかに恐れたかを。それは神が、あなたに対して陣を張る者の骨をまき散らされたからだ。あなたは彼らをはずかしめた。それは神が彼らを捨てられたからだ。」と。愚か者たちは自分たちが傷つけて来た者を支えているのがだれなのかを目の当たりにするのです。正しい者とともにおられる存在がだれなのかを目の当たりにするのです。そして、その方が自分たちが拒んできた神であること、正しい者たちの避け所であることを見るときに、彼らはそこでようやく気付くのです。自分たちがずっと否定して来た神が実際に存在していること、そして、自分たちのこれまでの歩みが生きた神を怒らせる愚かなものであることをそこで気付くのです。

しかし、彼らは知らなかったわけではありません。これまでにいくらかでもそれを認める機会があったのです。周りを見渡せば神の存在は明らかだったのです。自然界を見るなら神のすばらしさは明らかでした。また、私たちの良心も神がおられることを明らかにしています。しかし、それを無視して否定して好き勝手に生きている者、生きようとしている者は、最後の最後に神の存在を目の当たりにする。そのときにはもう手遅れなのです。そのことに彼らが気付いたときに、彼らのうちに広がるものは酷い恐れだったのです。

神を否定して生きていく者は恐れを抱く。同時に、一方で主に愛して従おうとする者には喜びがあることを見る事が出来ます。主ははびこる悪をそのままにして置かれる方ではない、必ず正しくさばかれる。そして、その神が正しい者とともにいて必要な守りを与えてくださるのです。避け所としてともにいてくださるのです。ダビデは62：7-8に「避け所」についてこのように記しています。「7 私の救いと、私の栄光は、神にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。8 民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。セラ」と。私たちがたとえ迫害を受けていたとしても私たちは一人ではない。どんな敵からもどんな困難の嵐からも守ってくださる神が避け所として私たちをともに歩んでくださると言うのです。それが神に従う者が持っている希望です。しかし、「神はいない」と否定する者、自分の思うままに生きようとする愚か者は、主の厳しいさばきの前に恐れ戸惑うことしかできないのです。これが愚か者を待ち受けている結末でした。彼らは余りにも愚かなことをしているゆえに、余りにも主に忌み嫌われる愚かなことをしているゆえに、彼らに待っているのは神の正しいさばきでしかなかったのです。すべての者は例外なくこの神の厳しいさばき待つしかないのです。

### 3. 愚か者に与えられる恵み : 神にある救い 7節

最後にこの詩篇に見るのは、神は私たちのような者に恵みとして救いを与えてくださるということです。神にあるその救いが7節に記されています。「ああ、イスラエルの救いがシオンから来るように。【主】が御民の繁栄を元どおりにされるとき、ヤコブは楽しめ。イスラエルは喜べ。」、周りに悪が溢れていること、そして、人々が神の存在を否定して自分勝手に生きているその状況を目の当たりにして、ダビデは主が救いを与えてくださることを熱心に期待し祈っていました。「イスラエルの救いがシオンから来るように。」と。

ダビデはこうして主がご自分の王を立てた聖なる山シオンから自分を救い出してくださる、そんな救い主が来ることを待ち望んでいました。ダビデはそのことを待ち望んでいたのです。でも、新約の時代を生きる私たちは救い主がもう来られたこと、救い主イエス・キリストがこの地上に来られたことをもう知っているのです。そして、私たちはそのことを感謝することができるのです。

これまで詩篇14：1-6を見ました。そこを見たときに、生まれながらの人間は例外なく神の存在を否定し神に背を向けて自分の好き勝手に生きている者だと、はっきりと記されていました。どれ程、

神のすばらしさが周りに示されていたとしても、それに見向きもしないで神に逆らって、神の前に御怒りを積み上げているそんな者だと。だれ一人として神を求めて生きようとする者はおらず、むしろ、自分には神は必要ないと心に決めてみな生きていたのです。私たちは腐り切っていてすべてが罪に汚れていて、そして、そんな愚かな者として生きていたのです。

だからこそ、すべての者が自分の内側を見ると、私たちに値したのはただ主の厳しいさばきだけでした。主が下されるものの中に救いなどなかったのです。それ程私たちのすべては神に忌み嫌われる罪に汚染されて愚かで腐り切っていたのです。もし、神が私たちをご覧になって私たちに神の怒りが注がれたとしても、私たちはだれ一人それに対して何か言うことができる者はいませんでした。だれ一人として救いに値する者はいなかったのです。

しかし、そんな希望のなかった私たちに主ご自身が救いを備えてくださったのです。私たちの状態をご覧になった神が、私たちに御怒りを下すのではなく、代わりに愛を示し、そして、神のひとり子イエス・キリストを送ってくださった。この方が来てくださったからこそ、この方が私たちが本来受けるべき罪の罰を受けてくださったからこそ、十字架の上でその血潮をもって私たちの罪を贖ってくださったからこそ、私たちは今希望をもって生きていくことが出来るのです。

いったい、なぜ、このような愛を私たちに示してくださったのか？神に逆らって神を否定して生きて来た愚かで何の価値のない者のために、どうして主はご自分のいのちをささげてくださったのでしょうか？それは私たちには分かりません。ただ私たちに分かっていることは「それは主の恵みだった」ということです。私たちの理解を遥かに越えた主の恵みが、私たちのだれ一人として絶対に解決することが出来なかった罪の問題を解決して下さり、罪の奴隷をして生きていた者を新しく造り変えてくださったのです。私たちが何かをしたからではありません。主がご自身の栄光を現すために、主がご自身の恵みをもって私たちを救い出してくださいました。

エペソ2：8－10にこのように書かれています。「：8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。：9 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。：10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」

私たちは主によって救いが与えられ、今、大きな喜びをもって生きていくことができます。また、私たちに罪の赦しが与えられただけでなく、私たちは死からよみがえって今も生きておられる主が再び帰って来られるということ、その日を楽しみに今日を生きていくことができるのです。そして、その主に私たちがお会いするときに、私たちが持っている罪に汚れたからだがキリストに似た栄光のからだへと変えられる、そんな希望を持つ者として生きていくことができるというのです。

神の存在を否定しすべてにおいて汚れていた私たちが、こんな希望を持って生きていく者に変えられたのです。それは主の恵みだったのです。これが私たちに与えられた神からの恵み、偉大な神の救いのみわざでした。私たちはこんなすばらしい約束を今日このみことばから見る事ができるのです。

## 〇まとめ

私たちはこうして詩篇14篇を見て来ました。私たちに与えられた神のことばが私たちにこのように語りかけていたのです。では、私たちはそれに対してどのように応答するべきでしょうか？もし、ここまで話を聞いて来て、私はまだイエス・キリストを信じていない、自分には神の存在など関係ないと言う方がおられるなら、ぜひ、今日学んだみことばを自分のこととして考えてみてください。生きた神のみことばははっきりと、主を信じない者、神の存在は明らかであるにも関わらずそれを否定して生きるような罪人には必ず正しいさばきが待っていると語っていました。今、すべてのことが思い通りにいっているかもしれないし、順調にいっているかもしれませんが、自分たちの好きなように生きていて何の問題もないかのように感じているかもしれませんが、でも、聖書が教えていることはそれには必ず終わりがやって来るということです。

今日ダビデを通して見たように、必ず、すべての愚か者が主の前に立つ日がやって来ます。そして、その主の前に恐れを抱く日がやって来るのです。もし、そのときに自分が拒んで来た神が本当に生きておられると認めるなら、そのことにその場で気付いたとするなら、そこで恐れを抱いてもそれはもう手遅れです。ですから、手遅れになる前にこの主を自分の主と信じて今日からこの方のために生きてくだ

さい。自分のこれまでの生き方を悔い改めて、主を自分の主として自分のすべてをささげて生きる歩みを始めてください。

また、この聖書の神を自分の主と信じて従おうとされている皆さん、どうか、今日学んだことをいつも覚え続けてください。これが私たちがかつての姿であり、私たちがどのようにして変えられたのか、そのことを教えているすばらしいみことばでした。私たちが今日こうして救いを喜んで生きていくことができるのは当たり前のことではありません。どうしようもなく罪に汚れ神の御怒りを受けることしか値しなかった愚かな私たちを、主が救い出してくださった、主が恵みによって救ってくださったのです。だから、この主のあわれみにいつも感謝して主によって新しく造り変えられた者としての歩みを今日していくことです。私たちの神は今も生きておられるのだということ覚え、実際に存在しておられるということ覚えて生きていくことです。

皆さん、私たちがこの主が存在していることを知っているなら、私たちの日々の歩みは、神を否定して自分勝手に生きていたかつてのものと同じになっていないでしょうか？主のみことばが私に教えてくれていることに関して「いや、私は今それを受け入れたくないから」とか「私が今考えていることと違うから」と言って、神を中心に置く生き方ではなく、自分を中心に生きていないでしょうか？主を知識として知っていたとしても、「主を信じる」と口で言っていたとしても、生き方がそれを否定するものになっていないでしょうか？私たちの今の歩みはこの生きた神を証するものでしょうか？私たちの歩みはこの生きた神が存在しているということ覚え歩みでしょうか？

私たちはそれぞれ自分の信仰がどのような土台に立っているのかということいつも確認することです。私たちの主は生きておられる。だからこそ、私たちはどんな状況に置かれたとしてもこの方のうちに、この避け所のうちに平安を見出すことができます。私たちの神は生きて存在しているからこそ、私たちはこの方に希望をもって生きていくことができるのです。ですから、この主のすばらしさを覚えて、この主にお会いするその日まで、この置かれた地上にあって主の栄光を現す者として成長していきましょう。